

(作業用)防犯書籍原稿(第三段階)

【内容紹介】

【内容紹介】	1
====本編はここから====	2
突っ込んでくるバイク、街宣右翼、そして防犯へ - 元上司が語る著者の素顔 -	2
プロローグ:なぜ警察を辞めたのか	4
池田警察署での日々と留置場勤務	4
池田小学校児童殺傷事件が私に与えた衝撃	4
防犯への転身とその理由	5
防犯業界への認識と新たな挑戦	6
第1章 私が出会った1,000人の犯罪者たち ～その意外な真実～	7
1. 再び犯罪を繰り返す人たち ～常習化しやすい3つの犯罪～	8
(1)窃盗犯罪の3つの顔	9
1. ひったくり魔の告白 ～やめたくてもやめられない～	9
2. 生涯泥棒で生きる男 ～ある常習犯の告白～	9
3. 万引き ～誰にでも起こりうる犯罪～	10
(2)薬物犯罪の深い闇 ～留置場からの警告～	10
(3)見えない被害者たち - 性犯罪の知られざる統計	12
(4)犯罪のない社会へ ～最大の福祉を目指して～	14
2. なかなか、なくならない「やっかいな犯罪」	15
(1)緻密な組織運営の自動車窃盗団	15
(2)いわゆるトクリュウ(匿名・流動型犯罪グループ)	17
第2章 知られざる留置場の日常	20
1. 起床から就寝まで、留置場の24時間	20
2. "職業訓練"はやめてくれ	21
3. 留置場と拘置所の日常 ～タバコからお菓子まで～	22
4. "生きるため"の収容願望 ～冬を越す人々の選択～	23
第3章 導き出した防犯の真実	24
1. 善人だけが入れない？オートロックの驚くべき実態	25
2. 泥棒は外観だけでお金があるかどうか分かる？	25

3. 玄関の謎の記号 ～その正体は？～	26
4. 「事前と事後の攻防 ～防犯と警備の本質～」	27
5. 防犯カメラの真実 ～抑止力の限界と可能性～	28
6. 優秀すぎる鍵が生んだ皮肉な結果	29
7. "留守だと分かる"は誤解 ～雨戸の防犯効果～	30
8. 見えない家は危険な家 ～外構の落とし穴～	30
9. ベランダは泥棒の抜け道 ～マンション防犯の落とし穴～	31
第4章 犯罪学との衝撃的な出会い - 現場の知見が学問と出会った時	32
犯罪学との運命的な出会い	32
理論と実践の見事な融合	32
新たな視点との出会い	33
これからの防犯を考える	33
エピローグ:余命宣告を超えて	33

====本編はここから====

突っ込んでくるバイク、街宣右翼、そして防犯へ - 元上司が語る著者の素顔 -

警察官に突っ込んでくるバイクに体当たり。アホや。

私「よけんかい！」

折元「逃げられたらアカンと思って」

私「お前が死んだら報告書がたいへんや。それで仕事が止まるやろ。俺らの仕事止まったら安全弱まるやろが」

折元「すいません」...そこで謝れる漢。それが筆者折元。

幸いこのときは運良く大きな怪我もせず相手にもさせずで無事検挙。現場で考えるより先に体が動く。本能で反応する。大事なことです。組織では困ったちゃん(>.<)

当時上司だった私は、刑事部門で調べ官(犯人の取り調べを担当する刑事)上がりでした。調べ官は如何に諭して立件するかの仕事です。留置管理部門は昔は刑事部門でした。しかし時代の流れで拘束被疑者の生活と取り調べ受認義務は別となり「捜管分離」、つ

まり拘束被疑者であってもプライバシーは大事に守られる時代に。被疑者にすれば留置場はホッと出来る場所になりました。

留置場で被疑者はポロツと本音を洩らす場所に。勤務員との会話は、取り込まれを防止するために必要最低限と指針されています。反面、会話を含めての観察で被疑者を把握する事を求められます。動向や考え方を見極め自殺などを防ぐ。自殺されては事件の真相究明が出来なくなる。

その大きな目的のため被疑者から話を聞き出す。常習被疑者にとっては自らの手口はメシの種、自慢の技です。やすやすと捜査部門には口を割らない。しかし自慢話はしたい。その自慢話を本能的アンテナでキャッチ。それを掘り下げ防犯に活かす。

捜管分離で情報共有されないジレンマはありますが、そこは調べ官のスキルアップしかない。被害発生後に対応する部門と防ぐ部門はある意味 矛と盾。プロ犯罪者本音を聞き出したことを探求し防犯に活かせるのは、現職を離れた者のみの現状。マニュアルに出せない現実。

交番のお巡りさんとして、一緒に第一線で過ごしているとき、大音量で交番前を通過の右翼街宣車を、若手警察官を連れてクロタン(黒単 交番のお巡りさん移動用単車)で追いか

「お前ウルサインじゃ！」と噛まし上げる正義漢。

右翼が「制服のお巡りがナンジャ！大音量の証拠出せや！」

折元怯まず「俺の耳で判るんじゃ！」

右翼ボリューム下げる...(・・;)

その正義漢が、留置勤務で自慢話と捕まった後悔だけで被害者に対して反省のない被疑者と接した。究極は「被害者にならない人を増やす」に。被害者丸損の実態とムチャ出来ない警察を見たからの決断でした。

どうすれば被害者にならないか。防犯プロになってからも彼は貪欲で、当時捜査指揮をしていた現役の私を質問責めにしてきました。

余命宣告を何度も跳ね返し、生きてる間は防犯啓蒙に尽くす姿は、ホンマ頼もしい。

著作を読んで、現役時代に彼が書きまくった始末書で鍛えた文書能力を垣間見ます。防犯マニアでもある私が知る限り、彼の知識と技術は常に最新かつリーズナブル。大阪俚約人種の私が見てもオススメです。

当時の上司

元大阪府警 刑事&留置管理部門 計30年

防災士 岩津雄一

プロローグ:なぜ警察を辞めたのか

池田警察署での日々と留置場勤務

昇任試験に合格して、それまで居た府警本部の所属から、次に赴任したのが、今も忘れない大阪府池田警察署の地域課でした。空気の良い静かな街で、触れ合う住民の方も良い人ばかりだった記憶があります。ダイハツの本社があり、日清製粉のカップラーメン記念館もある街です。

地域課はつまり交番のお巡りさんで、警察学校から出てすぐに曽根崎警察の地域課を経験しているので、さほど違和感無く勤務していましたが、数年後の辞令が留置管理係への異動でした。

それまで外の空気を吸って仕事していた私が、隔離された留置場勤務への異動は初めての業務でもあり、また世間と隔離された世界でもあり、期待と不安の入り混じる勤務でした。

24時間勤務の三交代制でペアの上司はこの世界では有名な、とにかく面白い人で、留置人に厳しく規律を守らせながらも、それさえやっていれば、後は楽しい会話で盛り上げたり、相談にも乗るなど、かなり面倒見の良い方でした。

私もそれを見習って、留置人と接して行く中で、現在防犯セミナーで話をしている、犯罪者の本音、手口、捜査側だけに居たら絶対知り得なかった内容まで、聴くことができるようになっていきました。

池田小学校児童殺傷事件が私に与えた衝撃

そんな中、翌日が泊まり勤務の休日にテレビで報道されたのが、池田小学校児童殺傷事件でした。

「明日出勤したら、こいつが中に居る」

そう思うと複雑な気持ちだったのを覚えています。

池田という場所は大阪府の中でも事件は少なく本当に静かで良い街です。地元池田警察署勤務の警察官が「ここで住むのも良いな」と思う、レアな街です。

誤解のないように書きますが、警察官はその勤務先の裏の出来事しかほぼ見ないので、勤務地を「良い街」と感じる事は少ないと感じてしまう傾向があるのです。

出勤するとやはり警察署が報道陣に囲まれており、出入りする際は気を使う状況でした。

制服に着替えて留置場内に入ると、直ぐにその件に関する引継ぎを受けました。書類にも目を通して、事件概要も把握して、被疑者(この時点では被疑者)と接しました。

彼との会話や諸々の話は、この書籍の主題ではありませんので深掘りしませんが、この事件が私の人生の分岐点となったのは間違いありません。

留置場内の被疑者本人との会話。

監視していた彼の様子。

そして、諸用で留置場外に出た時の、刑事さんや現場に当たった地域課の皆さんから聞く凄惨な現場の実話。

正気を無くして落胆されている被害者家族。

「これを防ぐ事は出来なかったのか？」との思いが湧き上がるだけでなく、被害者家族の方々への、自分の無力さを痛感していました。

この出来事をきっかけに、犯罪捜査を主とし、どうしても事後対応が中心となる「警察」という組織の限界と、自分が目指したいものとのギャップが徐々に大きくなっていきました。その中で、「警察官を続けるべきか、それとも思い切って防犯の世界に進むべきか」という葛藤を数年間抱え続けました。また、「もし辞めるなら、警察で悔いのない仕事をしてからにすべきだ」という思いも強くありました。

警察官は公務員です。公務員の給与は税金から支払われるため、その源をたどれば雇い主は大阪府民の皆さんということになります。私は、大阪府民の皆さんが納得できる働きをしたかどうかを自分の判断基準にしたいと常に考えていました。そのため、退官を決断する際には非常に悩み抜きました。

最終的には以下の理由で退官を決めました。

- 詳細は控えますが、ある意味「歴史に残る」と思えるほどの良い仕事を成し遂げたこと。
- 勤続20年を超えると退職金が大幅に増えるため、19年6か月の時点で退職届を提出しました。

退職のタイミングについては妻からさまざまな意見がありましたが、最終的には私の思いを理解してくれました。しかし、結果的には諸事情で退職日が数か月遅れ、19年10か月というタイミングで退官することになりました。そのおかげで、退職金が増える区切りを無事に迎えることができたのです。

さらに、当時の上司が水面下で動いてくださり、通常の依願退職者にはほとんどない「本部長賞詞」という名誉ある表彰をいただきました。この表彰は今でも事務所に大切に飾っています。

防犯への転身とその理由

大阪体育大学を卒業後、約20年間警察官として社会に貢献してきました。しかし、警察官を辞めた後、私は再び「社会人1年生」として新しいスタートを切りました。名刺交換の仕方すらよく分からない状況から、とにかくがむしゃらに、池田小学校事件をきっかけに抱いた「犯罪を事前に防ぐことが、国民のために大きなメリットになる」という信念を実現しようと動き始めました。

周囲の方々に恵まれ、防犯事業は順調に伸びていきましたが、社会人経験の浅かった私が経営する会社は、リーマンショックの波を超えることができず、設立から4年余りで倒産しました。その翌年には、実際に血を吐くほどのストレスが原因だったのか、がんを発症。手術は成功したものの、抗がん剤治療の失敗で後遺症に悩むことになり、さらにがんの転移から「余命最短8カ月」という宣告を受けることになりました。

しかし、「絶対生きるんや」という強い思いからか、余命宣告を受けたがんは奇跡的に消滅しました。その後もものべ13回にわたるがんの手術を経験していますが、周囲の人からは「全くそんな病気をしたようには見えない」と言われるほどの状態を保ち、現在も生きています。

このあたりの詳細については、私が別途執筆した『[がんと壮絶バトル13回：絶望からの大逆転や！](#)』に記していますので、ご興味のある方はぜひご覧ください。

がんから復活を遂げた後、防犯業界の方々から「折元さんの防犯の話を、一人でも多くの人に伝えるべきだ」とのお言葉をいただき、さまざまな協力や知恵、励ましを得て、2012年11月14日、一般社団法人「全国防犯啓蒙推進機構」を設立するに至りました。

この社団法人を設立するにあたって、私は以下の3つのことを心に決めました。

1. 余命宣告からの復活は、この世で生きる使命が必ずあることを自覚すること。
2. その使命は、犯罪者から教わった目線や手口の情報を基に、適正で正しい防犯知識を広く普及すること。
3. この考えや経験、知識を未来に残し、今後の社会のために役立てること。

これらを大命題として掲げ、社会への恩返しとして防犯普及活動に取り組んでいます。これが、私に命を与えてくれている社会への報恩だと信じています。

防犯業界への認識と新たな挑戦

警察官だった当時、外から見ていた防犯業界に対して、私は「すごいな」と純粋に感心していました。それは、警察官である私たちは防犯の専門家ではなく、全くの素人だったからです。未知の世界は全てが素晴らしく見え、業界の人々も「すごい人たち」に感じられました。しかし、いろいろと分かるようになってくると、必ずしもその全てが本質を突いているわけではない、という現実にも気づき始めたのです。

これはどの業界でも同じだと思います。例えば、警察の世界や社会に出てからもそうでしたし、学生時代のスポーツクラブでも同じでした。ファンとして外から見ていると、スポーツ選手はただ「カッコいい」と感じますが、その裏には泥臭くて厳しい練習が全ての基本になっているという現実があります。防犯の世界も同様に、内部に足を踏み入れて初めて見える現実がありました。

防犯業界に携わる中で気づいたのは、警察時代の留置場勤務で犯罪者たちから直接聞いた「犯罪現場の真実」と、世間で「防犯のプロ」と呼ばれる人たちが語る「泥棒像」には、大きな食い違いがあるということでした。多くの「プロ」が語る話の中には、事実に基づいているようで現実とかけ離れている内容や、真実とは異なる部分が数多く含まれていました。

後から考えれば、これは当然のことです。

テレビなどに登場する「防犯のプロ」と呼ばれる人たちは、防犯機器については詳しいものの、犯罪者と深く関わった経験がない一般人（善人）です。

例えるなら、ワインを飲んだことのないソムリエのようなものです。そのため、彼らが語る「犯罪者はこう考える」という話には、留置場の看守として犯罪者と深く関わってきた私や実

際の犯罪者から見れば、思わず笑ってしまうような内容も多いのです。しかし、テレビのコメンテーターやタレントは、それを真剣に聞き入れ、「へえ～」と感心してしまうのが現実です。

一方で、捜査のプロである警察官もまた、防犯機器や防犯の理論については全くの素人です。これもまた「ワインを飲んだことのないソムリエ」のような状態です。

それにも関わらず、元警察官が防犯業者の話をそのまま受け売りし、「防犯カメラが効果的だ」「光を泥棒は嫌がる」といった内容を語ることがあります。しかし、少し知識のある人がそれを聞くと、的外れな内容に思わず笑ってしまうのです。

このような状況を目の当たりにし、私は当初、防犯に関する話を控えるべきだと考えていました。しかし、ある時、親しい年配の尊敬する方からこんな言葉をいただきました。

「折元さんは警察のことも、防犯のことも分かっている数少ない人やから、あなた みたいな人が、ちゃんと話をしていかなあかんと思うで」

その言葉に背中を押され、自分が「警察」と「防犯」という二つの視点を併せ持つ、ハイブリッドタイプの人間であることに気づきました。そして、自分の経験や知識を活かすべく、防犯セミナーを始めることにしたのです。

第1章 私が出会った1,000人の犯罪者たち ～その意外な真実～

「本当の犯罪者って、どんな人たちなんだろう」

そう思われる方も多いのではないのでしょうか。

私は警察官として20年間、1,000人以上の犯罪者と接してきました。その経験から言えることは、犯罪者は決して生まれながらの「悪人」ではないということです。

彼らが犯罪に手を染めた理由は様々です。生活に困って窃盗に走った人。好奇心から軽い気持ちで始めてしまった人。組織の中での立場上、仕方なく関わった人。そして、ある日突然、予期せぬことから犯罪者になってしまった人。

しかし、どのケースにも共通しているのは「人の欲」です。お金が欲しい、スリルが欲しい、認められたい…。その欲望が、正しい判断を狂わせてしまうのです。

皆さんの多くは、犯罪者と直接会う機会はないでしょう。

だからこそ、私が出会ってきた彼らの実態をお伝えしたいと思います。それは、皆さんが持っている「犯罪者像」が、実は大きく間違っているかもしれないからです。

この章では、私が警察官として出会った犯罪者たちの素顔をお話ししていきます。それは、より効果的な防犯対策を考えるためのヒントにもなるはずです。

1. 再び犯罪を繰り返す人たち ～常習化しやすい3つの犯罪～

刑務所に入って反省したのだから、もう二度と犯罪は起こさないだろう」

多くの方は、そう考えるのではないのでしょうか。私たち日本人は基本的に「人は善良である」という性善説の考え方を持っているからです。

しかし、現実はその単純ではありません。

刑務所関係者の間では「懲役太郎(ちょうえきたろう)」という言葉があります。これは、何度も刑務所に入る常習犯のことを指します。

確かに暴力団など、そもそも違法な組織に属している人が再び罪を犯すのは、ある意味当然かもしれません。しかし、一般の人の中にも、同じ罪を繰り返してしまう人が少なからずいるのです。

特に以下の3つの犯罪は、再犯率が高いと私は考えています。

(1) 窃盗

(2) 薬物犯罪

(3) 性犯罪

もちろん、これは私の経験則に基づく個人的な見解です。1度の犯罪で深く反省し、二度と罪を犯さない人も大勢います。しかし、この3つの犯罪には「再び手を染めてしまう」という特徴があるように思えるのです。

なぜ、これらの犯罪は繰り返されやすいのか。次は、それぞれの特徴を詳しく見ていきましょう。

(1) 窃盗犯罪の3つの顔

窃盗といっても、その形態は様々です。代表的な3つのケースをお話ししましょう。

1. ひったくり魔の告白 ～やめたくてもやめられない～

ある男性は、未成年の頃に友達との「根性試し」でひったくりを始めました。

「最初は警察が来るんじゃないかとドキドキしていました。でも捕まらないうちに、だんだん罪悪感が薄れて行って…」

彼は、主におばちゃんたちを狙っていたと言います。弱い人を標的にする、まさに卑劣な犯罪です。

しかし、これだけひったくりが社会問題になっているのに、今でも道路側にバッグを持って歩く人、スマホを見ながら歩く人が後を絶ちません。被害者が悪いわけでは決してありませんが、自分の身は自分で守る意識を持つことが大切です。

彼は逮捕された時、こう話しました。「実はほっとしました。もうやめたかったんです。でも、自分ではやめられなくて...」

2. 生涯泥棒で生きる男 ～ある常習犯の告白～

私が担当した「○○のおっちゃん」は、気さくに裏話をしてくれる常習の泥棒でした。

ある日、私は彼に言いました。「もう歳なんだから、次出たら泥棒は辞めなアカんで」すると彼は、苦笑いしながらこう答えたのです。

「おやっさん(捕まるのに慣れた犯罪者は看守の事をおやっさん、担当さんと呼ぶ)には正直に言いますわ。わしら、所詮一生盗人ですわ」

「出たところで働く場所ありませんねん。誰も雇ってくれへんし、雇われても何もでけへん」

「最後は刑務所の裏口から戸板に乗って出るんやと腹決めてます」

※戸板に乗って、、、は、刑務所内で死んで、戸板で運ばれるという意味。

私は何も言えず、ただ悲しい顔をしていました。

すると彼は「そんな顔せんといってください。笑顔で刑務所へ行ってきますわ」

と、逆に私を気遣ってくれたのです。

おっちゃんは、今まで何度も捕まっています。だから今回は懲役も長い可能性もありました。元気に出てきたら又泥棒で飯を食い、最悪は刑務所で一生を終える人生なのです。

3. 万引き ～誰にでも起こりうる犯罪～

万引きは、最も一般人に近い窃盗犯罪かもしれません。

「万引き」で刑務所にいく事は非常にまれであると思いますが、「万引き」で捕まった人から聞いた話では「どうしても、やってしまう」らしいです。

もちろん「万引き」の中でも生活苦で食料を盗む「万引き」と、財布の中にはお金をしっかり持っていて、調べてみれば一部上場の社員で、見た目も私たちよりちゃんとしている人が、「つい癖で」やってしまう人もいました。

それに、他の泥棒と同じで、何度も成功体験を積むと、だんだんお金を持っていたとしても、財布からお金を払う事が、馬鹿らしく感じてくるのも人間ということです。

中には女性で「生理になると万引きをしてしまう」という人も少なくなかったです。何がそうなるのか男の私には分かりせん。

私に対応した女性は20代の美人で、誰もがあこがれる職業の方でしたので、

「子供さんができた時に、子供さんを悲しませない為にも、何とか自制してほしい」

とお話をした記憶があります。

「窃盗」全般で、比較的**再犯者**が多いと私が思う理由は、やっぱり「癖(くせ)」なのだろうと思います。

どうしても必要ではない物を万引きする人ほど、「スリル」や「精神的な欲求」の衝動で行動してしまい、決してお金がない訳ではないのに盗んでしまう。その行動の理由を象徴しているのかと思います。

(2) 薬物犯罪の深い闇 ～留置場からの警告～

薬物犯罪は「中毒症状」が出てきますから、なかなか辞められないものです。逮捕された時には薬物から強制的に離れられる期間があるため、それが一番の断薬のチャンスなのですが、残念ながら**再犯者**が多いのが現状です。

薬物にはまる人たちには共通の特徴があります。「我慢が苦手で、何かから逃げたい、何かに頼りたい人」という傾向です。「何かあっても、ぐっところえて生きていく」という人は、あまりいません。

留置場内では月に**1～2回**、医師による診察が行われ、必要に応じて薬が処方されます。診察も投薬も税金でまかなわれています。

薬物事犯で捕まっている人の特徴として、「一番強い睡眠薬」を求める傾向があります。多くの薬物犯は、医師からその薬を処方してもらうための話し方を熟知しています。例えば知らなくても、他の収容者から教わるため、最終的には「一番強い睡眠薬」に変わっていきます。

留置場が犯罪者同士の「職業訓練の場」になってしまっているのは、一般の人たちはあまり知らないことでしょう。様々な手口を教え合っているのを見るのは心が痛みました。

薬は留置場の看守が管理し、処方通りの時間に服用させますが、特に精神的に弱い人は処方以上の量を欲しがるとも特徴です。

女性の薬物常習犯は、男性とは少し違う形で薬物中毒になっていきます。多くは交際している男性が薬物中毒者だったというケースです。最初は拒否していても、交際相手の誘い

を「断り切れず」に一度使用してしまい、そこから抜け出せなくなります。人との付き合いが人生を大きく狂わせる典型的なケースだと感じました。

薬物中毒者の症状は凄まじく、人間性が崩壊していく様子は見ていられないほどです。重症の人は、皮膚と筋肉の間を「虫が這う」感覚に苦しみ、また別の人は周りから虫の大群に取り囲まれる幻覚を見て、大声で叫びながら暴れ出します。見ている側も恐怖を感じるほどです。

これは現場での「捕り物」時の話で伝聞です。

中毒患者が長屋の屋根から屋根を飛び回って逃げており、その距離4mほどはある間を、次々と飛んでいくらしいのです。

もちろん警察は、いつか落ちてくるのを待って、柔道や剣道の猛者(もさ)が複数で待ち受けて、落ちてきたところを4人ほどで抑え込みました。ガリガリの痩せた男がその4人をみごとに弾き飛ばしたことがあったようです。

中毒患者は、普通の人が出さない「火事場のバカ力」が継続して出るようで、暴れている人を取り押さえるのは至難の業なのです。

中毒患者が包丁を持って暴れていたところ、包丁を持っている手首を剣道の上段者が、六尺棒(樫の木のこん棒)で打ったものの、包丁を離さなかったとのこと。

逮捕後病院でレントゲンを撮ると、腕の骨が完全に折れていたそうです。なのに包丁を離さなかったことに、驚かれていました。

ただし、「火事場のバカ力」を出し続けていたその人は、力尽きると数日間眠ったままになったそうです。

当然、この「薬物犯罪」で捕まった人たちは、出所後に過去の薬物がらみの知人に出会ってしまうことや、せつかく薬を絶ったのに、自分の弱さから、また自ら探して薬物を入手してしまう事例が、少なくないようです。

余談ですが、「薬物の売人」は基本的には薬物はやらない、と彼らは言っていました。

中には売人が薬物中毒になっているケースもありました。

この場合商品に手をつけてしまうわけですし、薬物をやらない売人は「あんなん、やる奴は単なるアホですわ」と言っており、その後の怖さを知っているのと、先輩売人からこんこんとされている様子でした。

ちょっと皮肉な話です。

今では覚せい剤だけでなく、合成麻薬や様々な薬物が若年層にまで広がっています。夜の街では簡単に入手できる状況です。

警察の取り締まりだけでなく、私たち大人全員が薬物の怖さをしっかりと若者に伝えていかなければならない時代です。これは社会全体で取り組むべき重要な課題だと考えています。

(3) 見えない被害者たち - 性犯罪の知られざる統計

「性犯罪」は一般の方は「ほとんどない」と思われているかもしれませんが、実態は大きく異なります。

警察統計上では、確かに多くはないと思われる罪種ではありますが、現実には「私や私の親族は大丈夫と言える数ではない」罪種なのです。なぜなら、法務省が4年に1度実施している「暗数調査」で、驚くべき事実が明らかになっているからです。

この調査では

「過去5年以内の犯罪被害経験」

「被害の種類」

「警察への届出有無」

などを尋ねています。

結果を見ると、被害に遭って警察に届け出た割合は「窃盗被害で約3分の1」「性被害では10数パーセント」に過ぎません。

つまり、警察統計に表れる件数の実に6～7倍もの性犯罪が実際には発生しているのです。さらに、被害者は「あったことを他人に言えない」と悩み、アンケートでも被害を隠すケースがあることを考えると、実際の発生件数はさらに多いと考えられます。

よく防犯のプロの人たちは警察統計だけを取り上げて説明していますが、是非ともこの真実を知ってほしいと思います。繰り返しますが、警察統計は警察に被害届が出た数の統計であって、警察の知らない犯罪発生件数は含まれていないという事実です。

ある日、留置場に「連続強姦魔」が逮捕されてきました。

彼は非常に美男子で話を聞いてみると素人バンドでは有名な人のようでした。もちろんモテる人なので、正式に交際している女性だけで10人以上いるにもかかわらず、一度強姦するとその快感が忘れられず、交際女性との関係だけでは満足できないという、まさに病氣です。

その手口は、街を歩いていて気に入った子がいると尾行。まずは居住している部屋を特定。その部屋を今度は時間や曜日を変えて観察し、だいたい何時ごろ帰ってくるのか？一人暮らしかどうか？などを綿密に確認した上、決行する。例えば集合住宅であれば、ベランダ側から侵入して玄関を損傷させません。

当然、当該女性は疑いもなく玄関の鍵をあけて帰ってきます。

その上で自ら施錠して、室内に入ってきたところを見計らって刃物をつきつけて

「静かにしろ」

と襲うのです。

嫌がる女性を襲う行為でないと「燃えない」という、理解できない発想なのです。

非常に卑劣極まりない犯行で、到底許せるものではありませんし、その女性がその後の人生もこのトラウマを引きづるのかと思うと、やるせない気持ちでいっぱいです。

当然やれませんが、やってはいけないことなのですが・・・

「殴ってやりたい」

と心から思いました。

これは余談ですが、他の房に留置されているやくざも怒っていました。そのやくざも娘がいるそうで、自分の娘がそうになったらと思うと許せないと言いました。

まあ、そのやくざにも被害者がいるので、内心「同じじゃん」とも思いましたが、彼の言葉は納得できるものでした。

被害者やその家族は犯罪者が憎い。これが正常な気持ちで、世の中にとって最も大切な感情なのだろうと思います。

犯罪者も同じ人間だ！という論理も否定しませんが、少なくとも「自分のこと」として見てない発言（発想）だとは思いました。

余談の続きですが、「性犯罪」の被疑者は拘置所や刑務所に行っても、同じ理由で他の被疑者から虐められることが多いと聞きました。

これら「性犯罪」の特徴は、加害者の「性癖」が犯行の引き金（トリガー）になっていることです。そのため、なかなか止めることが難しいというのが私の見解です。

ただし、これは私個人の考えであり、すべての事例に当てはまるわけではありません。ただ、実際に何人もの累犯者を見てきた事実からの意見として、お伝えしておきたいと思います。

(4) 犯罪のない社会へ ～最大の福祉を目指して～

私は決して「窃盗」「薬物」「性犯罪」を犯した人たちが必ずまた犯罪を犯す、と言っているわけではありません。

一度の過ちを悔いて、罪を償い、新たな人生を送ってほしいと心から願っています。そのためどうすればよいのかを、日頃から考えています。

ここであえてこれらの話を書かせていただいたのは、残念ながら**再犯者**になりやすい罪種があることを皆さんに知っていただき、決して自らはこれらの犯罪を犯さないという強い決意を持っていただきたと思ったからです。

留置場に入っていた人たちも、何も問題がないときは「まさか自分が犯罪者になるなんて」と思っていた人がほとんどです。

人生には様々な「落とし穴」が待ち構えています。

「私はどんなに貧乏しても、どんなに欲に取りつかれても、犯罪だけは犯さない」—このような強い意志を持っていただければ、多くの犯罪を未然に防ぎ、突然被害者になる人を減らすことができると、私は本当に信じています。

実際、留置場から出て一般社会に戻ってきた人が、わざわざ警察署に挨拶に来てくれることが何度もありました。

彼らは必ず「おやっさん、本当にお世話になりました」

「もう二度と留置場では会いませんよ」と約束してくれます。

そして、その約束通り、彼らと再び仕事で関わることはありませんでした。

「犯罪の少ない安全な国」での生活は、「安全で安心な街」を作り、そこで「人と家族の安心な暮らし」が育まれます。

日本の政治家はあまりこの点に触れませんが、これこそが全ての人が当たり前に受けることができる「最大の福祉」であると、私は胸を張って言い続けていきたいと思っています。

2. なかなか、なくなる「やっかいな犯罪」

(1) 緻密な組織運営の自動車窃盗団

なくなる犯罪のひとつです。

ネットでも検索できますが、決して少なくない犯罪です。

なぜなくなるのか？

彼ら(犯罪者)から聞く話で納得できます。

- 日本車が世界で大変人気で高く売れるから

と、彼らは言います。

その中でもトヨタのランドクルーザーなどの四輪駆動車は絶大な人気ようです。

つまり、間違いなく需要があるので、供給するビジネス(窃盗)が成り立つのです。一般のビジネス界と同じですね。

ある自動車窃盗団の中堅幹部の話を総合すると・・・

実行犯は日ごろから街を走り回って、どの家にどの車種、色、概ねの年式の車があるか地図に落としています。

そこに、携帯電話に指示役の「山田さん」「鈴木さん」から、車種などの指定付きのオーダーが入ります。

また、盗んだ車をどこまで運ぶかの指示が来ますが、この携帯電話はそもそも飛ばし携帯(他人名義の携帯電話。過去はプリペイド式携帯なども使われた)などの所有者を追跡できない携帯で、なおかつ全て偽名。

また遭うこともないので顔も知らないという構図になっています。

実行犯の売り上げは大した金額ではなく、せいぜい1台あたり10～20万円程度とのこと。この金額がどこまで本当かどうかは知りませんし、時代による変遷もあるでしょうが、思ったほどの高額ではないことは確かです。

それでも、頻繁にオーダーが入るので、それはそれで充分美味しい仕事のようにです。

また、彼が言っていましたが、「人間が作るセキュリティーは、人間が絶対破ることができる」と自信満々に豪語していました。

実際に被害に遭った人の話では、「防犯カメラに映った映像を見ると、多額のセキュリティーをつけた車が、ほんの数分で何事もなかったかのように持っていかれた」と語る状況が現実のようです。

そして、指定の場所に車を置いて携帯で完了報告をすれば仕事が終わります。

次の誰かが、その車に乗って、また別の場所に運ぶのです。

もちろん、その先も詳細は分かりませんが、何人かの人の手を通していくので、一人ひとりにはさほど多額ではないのでしょうか、それぞれのリスクを小さくしているので、成り立つ構図なのだと推測できます。

最終的にはバラバラにされて、中古部品に混ぜて海外行きのコンテナに載せて全て完了です。

コンテナの中身が怪しいと思っても、税関も全て出して全て正規の中古品だったら、一般の経済活動に負担をかけることになり、ここまで来れば、現実に取り締まるのは難しいと思います。

全て組織立っており、流れもきちんとされています。たぶん組織のトップ層はよほど頭がよく、資金力もあり、且つ海外組織とのつながりも持っているのだろうと思います。

たぶん彼らが警察に捕まることは、残念ながらいいのではないかと思います。一度は、その人たちと会ってみたいとも思いました。

話は変わりますが、その被疑者に言われたことがあります。

「おやっさん、車を盗まれたくなかったら、どうしたらいいか分かりますか？」

私は悩みましたが、彼の回答は、

「人気のない車に乗ることです」(キッパリ！)と明確に答えました。

「確かにそうだ」、と妙に納得してしまう自分が居ました。

この話は自動車窃盗団という組織での犯罪のお話です。

単に個人で車を足代わりに盗んだり、最近多い、古いプリウスのパーツが高く売れることで、プリウスを盗んでパーツ取りして捨てる犯行の部類とは全く別です。

また、特に最近は中古車センターから大量に車を盗む人たちは不法滞在の外国人たちが多く、外国人の不法残留の人たちに数十万円で売るという別ルートの犯行も出てきているようです。

ビジネスもグローバル化していますので、犯罪もグローバル化しているという認識を、私たちは持つべきです。

外国人＝悪では決してありませんが、不法残留した途端に正業では生きていけないのに、不法残留が増えるというところに、危機感を持って頂きたいものです。

(2)いわゆるトクリュウ(匿名・流動型犯罪グループ)

今、世間を騒がせている、いわゆるトクリュウを、一般の犯罪と重ねてみると大きく間違えます。

なのに、テレビ報道も、防犯の専門家の中でも、一般の「泥棒」や「強盗」と重ね合わせて考えているので、この種の犯罪に対する防犯を間違えてしまう危険があると考えます。

まず、一般的な泥棒に関しては取り上げてきましたが、実は、強盗については、これまでさほど多い罪種ではありませんでした。

それは、単にお金を取る犯罪で泥棒と似通った見方もできますが、捕まった際の罰条が大きく違い、強盗の方が長い懲役を打たれます。

ゆえに、割に会わない(コスパがあわない)と犯罪者が考えるので、事案が少なかったといえると思います。

泥棒は、留守宅を狙い一定の技術を持って侵入しなければいけない上に空振りが多い職業です。

一方、強盗は人がいるところに行って、相手を脅してお金を出させるわけですから、比較的素人でもやる気になればできる犯罪とも言えます。

また、これまでは泥棒に入る時に留守と思っていたのに、あるいは忍び込みの手口で入って、住人に気づかれずに仕事を終えるつもりが、気づかれて等のケースで強盗に変わってしまった、いわゆる「事後強盗」になるケースが大半でした。

では、トクリュウはなぜ、こうも違うのか？

それは、実行犯が全くの素人であり、且つ指示役の話を鵜呑みにして犯行を犯すからです。

かつ、指示役は実行犯が捕まることを織り込み済みです。

これらの理由で、今の現状があるのです。

指示役としては、とりあえず犯行を終えた実行犯と連絡役が一度合流して、あるいは実行犯が指定口座に振り込むなどして収益金を指示役が確保できれば完了です。

その後実行犯が捕まっても「痛くもかゆくもない」という構図があるのです。

令和6年に銀座の宝石店でロレックスなどの高級腕時計などを多数奪った強盗は、被害品とともに早期に逮捕されました。

これは指示役としては完全な失敗で、被害品を仲介役が受け取った後であれば大成功になります。

指示役が逮捕後に面会に行った記者に語った言葉の中に、

「カード類の暗証番号を聞くときは先ず指を1本折れ、その上でもう1本折っても同じ番号を言えば、その番号は嘘ではない」

などと指示を出していたようです。

誠にもって許されない話ですが、確かに犯罪としては理にかなっています。

しかし、殺害に至ったことを聞いた指示役はかなり焦っていたという話もあります。

殺すつもりはなかった、とでも言うのでしょうか、高齢者を若い者が集団で襲い、いきなりハンマーで殴ったり、指を折るなどして拷問し、お金の在処を聞き出し、カードを出させて暗証番号を聞き出すなど、言語道断の所業です。

その年齢になるまで一生懸命働き、子供を育て、税金を払い、国、自治体、企業、家庭に貢献してきた人を、高齢者になってからそんな目に遭わせるなど許せない気持ちでいっぱいです。

本来は、最初はそんなつもりがなく始めたトクリュウの仕事でも、結果、これらの強盗に至った者の処罰は厳罰にしないと、残念ながら「捕まっても、、、」という気持ちが働き抑止力にならないのではないかと私は思っています。

実行犯は素人だから、指示役が「簡単そうに教えたこと」をとりあえずやる。あるいは脅されてとりあえずやる。

しかしながら、現場で自分が強盗を実行する際に「怖い」からこそ過剰に攻撃してしまい、想定外の重大な結果をもたらしてしまう。

今の若い方たちのほとんどは、私たちの時代と違って、親や先生から殴られていません。だから、痛さも分からないし、やっていい限度も分からない。その上、ゲームでゾンビなどが、いくら銃で撃っても立ち上がって向かってくる恐怖を知っているから、より過剰に攻撃をしてしまう。

私が現役の時代に、「メッタ刺し殺人」の想定される被疑者は女性でした。

それはやる側が弱いので、相手が起き上がって逆襲されたらどうしようという感情が働いて、必要以上に攻撃してしまうケースが多いからです。

それが、私が退官する頃には「メッタ刺し殺人」の被疑者が逮捕されてみれば、男性だったと驚いたこともありましたが、今の時代は少なくないと思います。

これも先に書いた時代の流れだと痛感していますが、トクリュウの実行犯にはその姿が合致すると思います。

本来の「泥棒」「強盗」は、自分が捕まるのが一番嫌なので、捕まらないようにします。

また、捕まった時に課せられる懲役などのバランスが、あまりにも悪いと思いとどまる要因にもなります。

だから、昔あった強盗は「銀行強盗」や「現金輸送車強盗」や「貴金属強盗」などなど、一度で多額の実入りが期待できるものが主流だったわけです。

トクリュウ事件とは圧倒的に違う風景が見えてきます。

これらを未然に防ぐには、まず「闇バイトに応募させないこと」が最大の防御であり、方策でしょう。

（薄々わかっているけど）「闇バイト」に応募しなければならないような、若い世代が豊かでない社会状況も遠因ではないと思われます。豊かであれば、「高額バイト！簡単な仕事！」など怪しい文言に見向きもしない人が増えます。「失われた30年」「経済成長しないこと」が、こんなところにも波及しているような気がしてなりません。

第2章 知られざる留置場の日常

皆さんは人生の中で一度も警察の留置場に入ったことはないと思います。

詳細は書けないのですが、問題の無い程度で留置場内での被疑者の生活について書かせて頂きます。

1. 起床から就寝まで、留置場の24時間

留置場内では規則正しい生活が送られています。

朝6時30分～7時に起床(警察署により時間は異なります)すると、一部屋ずつ布団を専用置き場に運び、「ハウキとチリトリ」で掃除を行います。掃除が終わると部屋に戻され施錠されます。この布団上げの際には、被留置者より警察官の数を多くするため、看守以外の応援が数名来ます。

全てが終わると次の朝食待ちです。

檻の中の食事といえば、美味しくない、人が食べるものではない、みたいなイメージがあると思います。

それは「臭い飯を食ってきた、、、」と、広まっていることがあるからだと思いますが、決してそうではありません。

看守はまだ朝食を食べていないので、用意をしながらお腹が空くような、ちゃんとしたご飯です。

警察署によって用意できる内容が変わります。

一日三食の予算は決まっていて、その費用の中で用意されますが、例えば私の経験した警察署の留置場では三食とも警察署内の食堂が作ってくれていたり、食堂が休みの時は私たちが近隣の「ほか弁屋」さんに買いに行っていましたので、想像ができると思います。

また、留置人も所持金があれば、警察署内の食堂(現在は外部提携業者)から昼食と夕食のみ(自弁)出前が取れます。追加のおかず的なものや、弁当まであって、全てカロリー計算された食べ物で、食欲旺盛な者は、留置場内で無料で出されるご飯の他、弁当までペロっと食べる者もいました。

ただし、この出前が取れるのは逮捕されて48時間を経過した者だけで、それまでの者にはできません。また、残ったからと言って、食べ物を他の留置人に分けることは禁止事項です。

よく何度も懲役に行っていた者が、

「わしら、シャバでは糖尿病でも、留置場、拘置所、刑務所までいくと、ちゃんと計算された食事になるんで、糖尿なくなって出れますねん」

などと言う者もいます。

昼食、夕食も全て留置場側で用意します。

例えば検事調べで昼食を先方とする予定のある者には、おにぎりの弁当等を事前に食堂に依頼しておいて、検事調べに同行する看守に手渡して持参させます。

また、署内の取り調べ室で取り調べを受けていた被疑者も、昼食時間になれば留置場へ帰らせる決まりになっています。

だから、テレビで見えるような取り調べ室で「かつ丼」なんてのは、あり得ません。過去にはあったかもしれませんが・・・

留置人のスケジュールにありませんし、もし刑事が取り調べ室で特別な扱いをした場合に、例えば被疑者が重要な証言をしても、裁判でその事を被疑者が弁護士に言った瞬間に「利益誘導による証言だったので無効」とされて、取り調べ内容が全て破棄される危険があるからです。

そして夕食後。

本人たちが持っている雑誌を入れて読ませたり、ラジオをかけて憩いの時間となります。

この間が、私と留置人たちの会話の時間のメインです。

取り調べに出ない被疑者たちとは、昼間の時間もずっと居ますので話はしますが、取り調べに出ていた被疑者たちはこの時間だけが憩いの時間となります。

そして就寝時間が近づくと、また外部から応援に来てもらって、一部屋ずつ布団の搬入を行います。そのタイミングで布団の中に何か入っていないかなど全てチェックします。

これが留置場内の基本的な生活スケジュールです。

週に2回の入浴と洗濯。定期的な医師の診察なども行われ、診察後の投薬まで全て警察予算から賄われます。

弁護士さんの接見(せっけん)は、全てのスケジュールは関係なく行うことができます。例えば取り調べ中でも、就寝時間後でも、弁護士接見は行えることになっています。

2. ”職業訓練”はやめてくれ

部屋の中では、犯罪者同士のいろいろな会話が展開されています。

昔は部屋の中では正座とか、隣の房の被疑者との会話は厳禁とか、いろいろ厳しい環境だったと思いますが、私が勤務していた留置場では、あまり大声で話す場合を除いて暗黙の了解でした。

ただし、もっと離れた女子房の被疑者への声掛けや、少年房の被疑者への声掛けは厳禁にしていました。

一番ショックだったのは、熟練の泥棒が、初犯の泥棒に「今のトレンドの侵入方法などを伝授」していた時でした。

それには流石に叱りましたが、中でヒソヒソ話す内容を把握することも難しく、放置するしかないのです。

ただし、だからと言ってお互いシャバに出てから、一緒に仕事とはならないようです。

基本的に泥棒はみんな一匹狼です。

一緒にやると収益も減り、リスクも増えるからです。

今の闇バイトの犯行は素人集団が、実行犯が捕まる想定で行われる犯罪とは、全く違うので、皆さんはその違いは知っておいてください。

3. 留置場と拘置所の日常 ～タバコからお菓子まで～

留置場と拘置所の処遇では大きな違いがいくつかあります。

まず、留置場では朝食の後、運動の時間があります。

運動と言っても屋根まで閉ざされながらも太陽光が入るコンクリートで囲まれた「運動場」と呼ばれる小さな空間に出しますが、その場で喫煙(1人煙草2本まで)ができたことです。今の時代は流石に全面禁煙になっているようです。

拘置所の運動の時間は運動場に出ることはできますが、煙草は厳禁です。留置場に入っている煙草を吸う被疑者は、よく「ここに居てるまでが喫煙できる最後ですわ」と言っていました。まあ、これも過去の話となりました。

しかし、中の被疑者たちから聞く拘置所では、「布団」などの差し入れもOKと聞きました。

また、お金があれば「お菓子」が買えるようです。

留置場では私が居た当時お菓子を食べることはできませんでした。今はお菓子を食えることができるようです。シャバでは反対にお菓子などは食べない者も、拘置所でお菓子の味を覚えるようです。

イカの味付けで干したお菓子を購入しておいて、ご飯時の味噌汁に入れると美味しいとか、情報交換をしておりました。

また、懲役時のわずかな楽しみについては、当時50代の被疑者が19歳に初めて刑務所に入り、出ては入りを繰り返して、シャバには延べ3年も出たことのない人でした。

彼の刑務所内での楽しみ方の話は、到底ここでは書けない内容でした。

ある意味、「人間は置かれた環境でここまで工夫して楽しく生きていくんだ…」と、感心した記憶があります。

留置場での生活は、決して悲惨な状況ではありません。

普通に生きていくにはお金がなくてもご飯が食べれて、風呂にも入れて、医者にも月に1~2回かかり薬ももらえる。

その全てが税金でまかなわれる。

ただ、規則的生活を自らの意思に反して強制的にさせられることだけ。

この点が中の人たちは最も嫌な点なので、いかに捕まらないかを考えて犯行を犯すのです。この点が闇バイトの犯罪者(実行犯)とは違う点です。

4. "生きるため"の収容願望 ～冬を越す人々の選択～

ただし、この空間に自ら求めて入る一定の人たちがいます。

特に年末になり、住む場所のないいわゆるホームレスなどは、2種類の方法で温かい場所で3食ご飯が食べられる場所を求めてきます。

私たちは彼らの事を「飯(めし)食い」と呼んでいました。

第1の方法は、何とか留置場に入る方法です。

コンビニ強盗や街角での傷害事件などを起こして警察に捕まる方法。

これで税金で留置場に入ることができます。

犯す犯罪はさまざまですが、これには、元々入っている被疑者たちも困ったもので、匂いがたまらない。

そこで、我々は留置場に入れた瞬間に、風呂の日でもないのに、まずは風呂に入れます。そして、留置場に完備している、警察官や留置場を出て行った者が権利放棄して置いていったジャージやスウェットなどを、官品(かんぴん)と呼んで、きちんと洗濯したものを与えて着替えさせます。

これで本人は冷暖房の効いた三食付き、風呂付、医者付きの生活を得ることができます。

第2の方法は、病院に入院する方法。

高いところから飛び降りて足の骨を折る

足などに火をつけて火傷をする

などです。

その上で周りの人に助けを求め、救急車で病院に行って入院する訳です。

病院の方がより一般人に近い生活で、看護師さんもいるし、いい生活ではあると思いますが、自傷する勇気が必要です。

日本はアメリカのように救急車が有料ではなく無料です。結局は面倒を見てくれますから、全ての人に優しい国ですね。

第3章 導き出した防犯の真実

留置場の看守として、私は多くの「泥棒」と寝食を共にしてきました。彼らは他人には決して語らない本音を、「刑事には内緒ですよ。おやっさんだけ言いますわ」と、私にだけは話してくれました。

その中で気づいたことがあります。世間一般で「常識」とされている防犯対策の多くが、実は犯罪者の実態とかけ離れているのです。

現場で私が見聞きした「本当の防犯」を語る前に、まず泥棒について知っておいていただきたいことがあります。泥棒と一口に言っても、十人十色です。プロと素人では、その手口も大きく異なります。

例えば「忍び込み」。

これは家人が寝ている時に侵入し、気づかれずに金品を盗む手口です。プロ中のプロがやる犯罪で、高度な技術と経験を要します。

一方「空き巣」は、文字通り**留守宅**に狙いを定めます。

多少の物音を立てても大丈夫なため、素人でも比較的やりやすい手口となっています。実際、統計的にも「空き巣」の件数が圧倒的に多いのです。

本章では、この「空き巣」、それも一般的な被疑者に焦点を当てて話を進めていきたいとします。

ただし、これも大前提として知っておいていただきたいことがあります。泥棒のほとんどは単独犯です。組織的な犯罪集団のように、体系的なマニュアルがあるわけでもありません。それぞれが独自の手口を持ち、その細部は千差万別なのです。

これから私が明かすのは、世間で「常識」とされている防犯対策の誤りです。

留置場という特殊な空間で、私が犯罪者たちから直接聞いた本音をもとに、真に効果的な防犯のあり方を提示していきたいと思います。

1. 善人だけが入れない？オートロックの驚くべき実態

お子さんが一人暮らしを始める時、親御さんが真っ先に探すのが「オートロックのマンション」ではないでしょうか。確かに一見、安全に思えます。しかし、私が留置場で出会った多くの泥棒たちは、このオートロックマンションを格好のターゲットにしていました。

なぜなのか。

それは皮肉なことに、防犯の素人が作った「安全装置」だからです。当初のオートロックシステムは、出る時にサムターンを回したり、ボタンを押さないと外に出られない仕組みでした。この頃は確かに、高い防犯性を確保していました。

しかし、「利便性」を優先した結果、今の主流は中からでる時に人の動きを感知して自動で解錠するシステムに変わってしまいました。ある意味、泥棒にとって願ってもない変更でした。実際、外国人窃盗団が狙う物件の大半がオートロックマンションだったという事実は、極めて示唆的です。

「平日の昼間をメインに活動していて、住人と出くわすことはないんですか？」

私がある泥棒にそう尋ねると、彼は当たり前のように答えました。

「ありますよ。でも笑顔で挨拶すればOKです」

なぜこんなことが可能なのか。それは住民同士のコミュニケーションが希薄な現代の集合住宅事情が背景にあります。

見知らぬ人でも、オートロックの中にいれば「誰かの来客か、住人なのだろう」と思い込んでしまう。しかも、愛想よく挨拶をされれば、「感じの良い人」という印象すら持つてしまうのです。

つまり、オートロックという設備は、本来入れるべきではない人を実は簡単に通してしまう一方で、善良な訪問者だけを締め出す、という逆説的な結果を生んでいるのです。

対策は決して難しくありません。しかし「安全神話」に浸る日本では、この問題に気づいている人が少なく、所有者や管理者による改善もなかなか進まないのが現状です。

私たちは、オートロックという「安全装置」に過度な信頼を寄せ過ぎているのかもしれない。本当の防犯とは、もっと別のところにあるのです。

2. 泥棒は外観だけでお金があるかどうか分かる？

「泥棒は外から家を見ただけで、お金があるかどうか分かる」

こんな都市伝説のような話を、私は留置場で実際に確かめる機会がありました。確かに、全くの嘘とは言い切れない出来事も存在します。

留置場で出会ったある常習窃盗犯のおっちゃんが若い頃に体験した、「伝説の泥棒」との出来事です。車を運転していると突然「そこで止まれ」と指示され、その「伝説の泥棒」は迷いもなくある家に入っていました。そして筆筒を開け、服と服の間に手を滑らせると、見事に現金の入った封筒を取り出したというのです。

しかし、この話には後日談があります。その晩のニュースで「被害現場には別の場所に隠してあった大金が無事だった」という報道があり、「伝説の泥棒」は悔しさのあまり、やけ酒を飲んだそうです。

実は、このような「伝説の泥棒」は極めて稀な存在です。このケースも外から見てお金があると認識して入ったのか、或いは自分たちが安全に侵入できると判断したのかが不明なので、微妙な事例ですが、留置場で私が出会った大多数の泥棒たちは、もっと素直に現実を語ってくれました。

「実際はね、空振りが結構ありますねん」

そう、泥棒とはいえ超能力者ではありません。家の外観から中の様子が分かるはずもないのです。ただし、経験則として「新築より年数の経った家の方が余裕がある」「年配の人は現金を封筒に分けて保管している」といった感覚はあるようです。

しかし、泥棒にとって最も重要なのは「捕まらないこと」です。彼らの第一の関心事は「安全に侵入して安全に帰ること」であり、「お金が盗れること」は二の次なのです。

つまり、泥棒稼業は「ローリターン」な商売です。だからこそ、彼らは「ローリスク」しか背負いたがりません。よく言われる「泥棒は侵入に5分以上かかると70%は諦める」という話も、このリスク計算に基づいています。

外にいる時間が長引けば長引くほど、誰かに目撃される危険性が高まります。「ローリターン」な仕事にそこまでのリスクは取れない—これが泥棒たちの本音なのです。

結論として、泥棒は家の外観から中身を見抜けるわけではありません。彼らは単に「入りやすそうな家」を探して、運任せで侵入を試みているだけなのです。

これを知れば、効果的な防犯対策も見えてきます。つまり、泥棒に「この家は面倒だな」と思わせることこそが、最も有効な防犯なのです。

3. 玄関の謎の記号 ～その正体は？～

「この記号は泥棒の印だ」

玄関に残された不可思議な記号を見て、そう噂する人は今でも少なくありません。この話を留置場で泥棒に話すと、彼らは大笑いしました。なぜでしょうか。

その理由は単純です。泥棒にとって、最も恐ろしいのは「捕まること」。特に家の外にいる時間は、最も危険な瞬間なのです。そんな彼らが、わざわざ危険を冒してまで記号を残すでしょうか。しかも、見知らぬ他の泥棒のために。

泥棒の行動パターンを見れば、さらにこの説の矛盾が見えてきます。

取り調べの際、泥棒は「〇〇市〇〇町〇丁目の〇〇さんの家」といった正確な住所は覚えていません。

ただし「〇〇町のこんな家から〇〇を盗んだ」という行為自体は鮮明に記憶しています。現場検証でも、自分が侵入した家を即座に特定できるのです。つまり、記号で場所を記す必要など、そもそもないのです。

「下見に何週間もかける泥棒」という話も、現実とは異なります。彼らは「留守かどうか」「周囲の目」「侵入のしやすさ」を確認する程度です。何週間も下見をして「空振り」では、泥棒稼業は成り立ちません。

では、これらの記号の正体は何なのか。

実は、その多くは訪問販売の営業マンによるものだと考えられています。檻の中の泥棒たちも、この見方に同意していました。

なぜ営業マンなのか。彼らは様々な商材を扱い、広範囲を回ります。すべての家の状況を覚えておくのは不可能です。そこで、「子育て中」「高齢者在住」といった情報を記号で残し、次の営業の参考にします。中には転職後も同じ記号を活用する者もいます。

もちろん、ごく稀に自分用のマーキングをする泥棒も存在します。しかし、それはあくまでも例外的な事例です。

防犯を考える上で大切なのは、根拠のない都市伝説に惑わされないことです。本当の危険は、もっと別のところにある**のです**。

4. 「事前と事後の攻防 ～防犯と警備の本質～」

「防犯の仕事をしています」

私がそう自己紹介すると、たいてい「セ〇ムさんですか？」といった反応が返ってきます。多くの方が、防犯と警備を同じものと考えているようです。しかし、この二つは本質的に異なる概念なのです。

防犯とは、文字通り「犯罪を防ぐ」こと。つまり、泥棒を「入らせない」「入ることを断念させる」「入りにくくする」という事前対策です。

一方、警備は「侵入があったら基地局に通報され、警備員が駆けつける」という事後対応です。

この違いは決定的です。

防犯は「侵入させない」ことを目指し、警備は「侵入があったら対応する」ことを約束します。まるで、予防医学と救急医療ほどの違いがあるのです。

誤解を招く原因の一つに、警備会社のテレビCMがあります。多くのCMが「警備」ではなく「防犯」のイメージを強調しているからです。また、実際には防犯機能のない設備にも「防犯」という言葉が安易に使われていることも、混乱の要因でしょう。

もちろん、警備が不要だと言っているのではありません。警備には警備の、防犯には防犯の役割があります。警備は「誰かが来てくれる安心感」を提供し、防犯は「侵入を物理的に阻止する」働きをします。

ただし、「警備システムを入れたのに泥棒に入られた」という声をよく聞きます。これは、警備と防犯の違いを理解していないために起きる誤解です。警備システムは侵入を阻止するものではなく、侵入を検知して通報するだけなのです。

中華料理と日本料理が別物であるように、防犯と警備も別のサービスです。あなたの目的に応じて、適切な方を(あるいは両方を)選択すべきでしょう。

ところで、警備会社のシールを貼れば泥棒が来ないという迷信があります。ネットオークションでそういったシールが売られているほどです。

しかし、留置場で泥棒たちから聞いた話では、効果は限定的とのこと。素人の泥棒は警戒するかもしれませんが、プロの泥棒は「警報が鳴ってから10分程度なら十分」と考えているそうです。

大切なのは、迷信や思い込みではなく、実効性のある対策を選ぶこと。そのためにも、まずは防犯と警備の違いを正しく理解する必要があるのです。

5. 防犯カメラの真実 ～抑止力の限界と可能性～

「防犯カメラ」という言葉をよく耳にします。しかし私は、この呼び方にある種の違和感を覚えます。より正確には「監視カメラ」と呼ぶべきではないでしょうか。なぜなら、多くの場合、このカメラは本当の意味での「防犯」機能を果たしていないからです。

まず、「防犯」の定義を確認しましょう。それは「事前に犯罪者の犯意や犯行を断念させる」こと。あるいは「犯行を行いにくする」ことです。では、実際のカメラはどうでしょうか。

私は、泥棒被害に遭ったマンションの自治会から依頼を受け、防犯カメラの映像を確認することがよくあります。そこで目にするのは、カメラの存在を知らながら、堂々と映り込む泥棒の姿です。確かに帽子やマスクで顔を隠してはいますが、カメラの存在自体は全く気にしていないのです。

これは何を意味するのでしょうか。つまり、監視カメラは泥棒の侵入を「防ぐ」ことはできていないのです。もちろん、映像は事後の捜査には非常に有効です。しかし、それはあくまでも「事後」の話であって、「防犯」とは呼べません。

ただし、カメラが全く防犯効果を持たないわけではありません。

例えば、下着泥棒のような比較的軽微な犯罪者には、一定の抑止効果があります。

また、エレベーター内のカメラ映像を1階エントランスにリアルタイムで映し出すことで、痴漢などの性犯罪を防ぐ効果も期待できます。犯行の様子を誰かに目撃される可能性があれば、犯罪者は行動を躊躇するからです。

※ちなみに、最近増加している「闇バイト」の実行犯は、カメラを嫌う傾向にあります。しかし、これは私がここで語っているプロの泥棒とは、まったく別の存在です。

このように、カメラには確かに効果があります。ゴミの不法投棄対策など、防犯以外の用途でも活用できます。しかし重要なのは、適材適所の設置と、その効果を正しく理解することです。

設置の際は、カメラ業者任せにせず、防犯の専門家に相談することをお勧めします。設置場所、カメラの性能、機種を選定など、専門的な知識が必要だからです。

最も危険なのは「カメラを付けたから安心」という過信です。カメラは確かに有効なツールですが、万能ではありません。正しい理解と運用があってこそ、その真価を発揮するのです。

6. 優秀すぎる鍵が生んだ皮肉な結果

あなたは日本の鍵メーカーが世界でもトップクラスの技術を持っていることをご存じでしょうか。

彼らは常に泥棒の新しい手口を研究し、すぐさま対策を施した新製品を開発します。その背景には「日本の安全を守る」という強い使命感があるのです。

鍵の世界も日進月歩です。最近では悪徳業者の出現も問題になっていますが、正規の組合に加盟している鍵屋さんは、日々技術を磨き、最新の防犯情報もキャッチしています。鍵の取り付けや交換を依頼する際は、そういった信頼できる業者を選ぶことが重要です。

「ディンプルキー」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。

この特殊な鍵に変更して、「これで安全だ」と自信を持つ方も少なくありません。確かにディンプルキーは優れた製品です。ただし、日本の鍵メーカーは、ディンプルキー以外にも数多くの高性能な防犯鍵を生み出しています。

しかし、ここで皮肉な事実をお話ししましょう。日本の鍵が優秀すぎるために、泥棒はもはや「鍵を狙わなくなった」のです。

警察庁の統計を見ると、侵入手口の主流は「バール破壊」や「サムターン回し」(サムターンとは、室内から鍵を開け閉めするツマミの事です)など、鍵そのものを標的としない方法になっています。泥棒からすれば、高度な技術で守られた鍵を破るより、他の方法を選ぶ方が効率的なのです。

では、どのような対策が効果的なのでしょうか。

私の結論は、警察が昔から提唱している「ワンドアツーロック、スリーロック」に行き着きます。複数の鍵を設置することで、泥棒に「この家は面倒だな」と思わせるのです。

考えてみてください。一つの鍵しかない家と、二つ三つの鍵がある家が並んでいたら、泥棒はどちらを選ぶでしょうか。答えは明白です。彼らは「入りやすく、逃げやすい家」を望みます。わざわざ手間のかかる家を選ぶ理由はないのです。

つまり、鍵の性能以上に重要なのは、「面倒な家」という印象を与えることなのです。これこそが、本当の防犯対策の基本となるのです。

7. "留守だと分かる"は誤解 ～雨戸の防犯効果～

「ちょっとの外出なら、雨戸は開けておいた方がいい。閉めると留守だと分かってしまうから」

防犯の講演会や展示会でよく耳にする言葉です。しかし、これは完全な誤解です。なぜでしょうか。

泥棒、特に空き巣は慎重です。家が留守かどうかの判断を、雨戸やシャッターの開け閉めだけで判断することはありません。彼らはもっと徹底的に確認作業を行うのです。

例えば、家の中を注意深く観察したり、電気メーターを見て家電製品の使用状況を確認したり。時には窓に小石を投げて反応を見たり、インターホンを押して応答を確かめたりもします。これほど念入りに調べるのは、「捕まるリスク」を極限まで減らしたいからです。

では、雨戸やシャッターを閉めることにどんな意味があるのでしょうか。

実は、泥棒が侵入を決意した時、開いている窓からの侵入ならたった1～2分で完了できます。しかし、雨戸やシャッターが閉まっていれば、それだけで大きな障壁となります。

これは玄関の「ワンドアツーロック」と同じ発想です。侵入に時間がかかれば、それだけ捕まるリスクが高まる。だから泥棒は、できるだけ手間のかからない家を選ぶのです。

つまり、雨戸を閉めることは、あなたの家を「面倒な家」にする一つの方法なのです。たとえ短時間の外出でも、家に備え付けの設備は最大限活用すべきです。

これは典型的な「一般人と犯罪者の感覚の違い」が生む誤解の一例です。私たちは「留守だと分かる」ことを気にしますが、泥棒は「侵入にかかる時間」を気にしているのです。

8. 見えない家は危険な家 ～外構の落とし穴～

住宅街を歩くと、高級そうな邸宅ほど立派な塀や生い茂った植栽に囲まれているのを目にします。プライバシーを守るための工夫でしょう。しかし、防犯の観点からすると、これは極めて危険な状況なのです。

なぜでしょうか。

泥棒が戸建て住宅に侵入する際、その標的となるのは意外にも玄関ではありません。多くの場合、家の裏にある勝手口や窓が狙われます。ここで重要なのが「視線」です。道路から直接見えない開口部は、泥棒にとって願ってもない環境となるのです。

泥棒が最も警戒するのは、家の外にいる時間です。周囲の人に目撃される可能性が最も高いからです。高い塀や生い茂った植栽は、皮肉にも泥棒に絶好の隠れ場所を提供してしまうのです。

「でも、塀が高ければ侵入は難しいのでは？」そう思われるかもしれません。

しかし、泥棒は塀をよじ登る必要すらないのです。私たちと同じように門から入ればいいだけです。そして一度敷地内に入ってしまうと、道路からの視線を遮る塀や植栽が、今度は泥棒の行動を完璧に隠してくれるのです。

夏場によく見かける大きな簾(すだれ)も同様です。日差しを遮る目的で設置されますが、その陰に隠れれば、目の前を人が通っても気づかれることはありません。通行人の視線を遮る目的で設置された壁も、防犯上は危険な要素となります。

では、どうすればいいのでしょうか。

自己診断の方法は簡単です。

道路から自分の家を見てください。勝手口や窓がはっきりと見えますか？見えるなら比較的安全、見えにくければ危険—それが基本的な判断基準です。

具体的な対策としては、塀は必要最小限の高さにとどめ、敷地の境界を示す程度にすることをお勧めします。植栽も構いませんが、開口部が隠れるほど伸ばさず、定期的な手入れが重要です。

プライバシーが気になる方は、カーテンで対応してください。強い日差しが気になるなら、省エネフィルムの活用を。道路からの視線は、実は最強の防犯装置なのです。

ただし、そもそも人通りの少ない場所は別の対策が必要です。また、どんな場所でも開口部の基本的な防犯対策は欠かせません。「見える」ことを過信せず、総合的な防犯対策を心がけることが大切です。

9. ベランダは泥棒の抜け道 ～マンション防犯の落とし穴～

「うちは3階だから大丈夫」「高層階なら心配ない」

マンション暮らしの方からよく聞く言葉です。確かに、ベランダを直接よじ登ってくる泥棒は稀です。しかし、より深刻な問題が潜んでいることを、私は知っています。

それは、マンションのベランダにある「隣家との仕切り」です。この部分は消防法により、火災時の避難経路として確保する必要があります。つまり、簡単に越えられる構造でなければならないのです。当然、この仕切りを頑丈にすることは法律違反となります。

ある日、マンションの自治会から防犯診断の依頼を受けました。その現場で私が目にしたのは、衝撃的な光景でした。上層階のベランダの仕切り板が、端から端まで破壊されていたのです。泥棒は一つの玄関から侵入した後、この仕切りを次々と破って隣室へ移動し、フロア全ての部屋に侵入していました。

この手口を使えば、10階であろうが20階であろうが、同じように被害に遭う可能性があります。では、どう対策すべきでしょうか。

答えは意外にシンプルです。マンションの場合、個別の対策ではなく、全ての玄関の防犯対策を徹底することが重要です。一戸も玄関からの侵入を許さなければ、ベランダ経由の被害も防げるのです。

実は、この種の被害は深刻な二次被害も引き起こします。玄関の防犯設備が不十分だった部屋の住人が非難されたり、ベランダ経由で被害に遭った住人の方が、より大きな損害を被ったりするケースも。本来なら泥棒に向けるべき怒りが、隣人への憎しみに変わってしまうのです。

賃貸物件ならオーナーが、分譲マンションなら区分所有者全員が、防犯対策を見直す必要があります。「高層階だから安心」という思い込みは、もはや通用しないのです。

マンションの防犯は、「個」ではなく「全体」で考える。それが、本当の安全への近道なのです。

第4章 犯罪学との衝撃的な出会い - 現場の知見が学問と出会った時

犯罪学との運命的な出会い

私が埼玉県大宮市で防犯セミナーを行った時のことでした。同じ会場で立正大学の小宮教授とゼミ生による発表がありました。

正直なところ、「犯罪学」という言葉すら初めて耳にする私は、現場で多くの犯罪者と接してきた経験へのプライドもありましたし、「どんなものだろう」という軽い気持ちで耳を傾けました。

しかし、その内容は私の想像をはるかに超えるものでした。彼らの語る理論は、私が現場で見聞きしてきた事実と驚くほど合致していました。さらに衝撃的だったのは、この考え方が遥か昔のヨーロッパで生まれ、学問として体系化されていたという事実でした。

理論と実践の見事な融合

本来、大学で教えられる学問は難解なものが多いものです。しかし、小宮教授とゼミ生たちの説明は、子どもにでも分かるほど明快で、それでいて犯罪者心理の核心を突くものでした。

この出会いに心を揺さぶられた私は、後日、立正大学の小宮教授を訪ね、さらに詳しい話を伺う機会を得ました。

特に印象的だったのは、犯罪が起こる場所を「入りやすくて見えにくい場所」と端的に表現する小宮教授の言葉でした。この簡潔で的確な表現に、私は深い共感を覚えました。

新たな視点との出会い

犯罪機会論の斬新な点は、犯罪者個人ではなく、犯罪が行われる「景色」に注目する点にあります。

警察官時代の私は、犯罪認知後の鑑識活動や捜査に重点を置いていました。しかし、真の防犯とは「事前に犯罪を起こさせない」ことにあります。これは警察の捜査活動とは全く異なるアプローチでした。

この気づきは、私の中に残っていた警察官としての視点を見直すきっかけとなりました。

自分のセミナー内容を見直してみると、実は知らず知らずのうちに、犯罪機会論に近い考え方を語っていたことに気がついたのです。それは、留置場で多くを語ってくれた犯罪者たちから学んだ経験が、自然とそういった視点を育んでいたからだと思います。

これからの防犯を考える

小宮教授の著作には、防犯に関する深い洞察が詰まっています。

皆さんもぜひ手に取っていただきたいと思います。その理論を理解し実践することで、自分や家族が被害に遭う確率を確実に下げることができると、私は自信を持って言えます。

エピローグ：余命宣告を超えて

「余命8ヶ月です」

その言葉を聞いた時、私は48歳でした。50歳にもなれないのかと、虚しさだけが心を満たしていきました。その頃、防犯の会社を経営していた私は、リーマンショックの波を受けて会社を畳まざるを得なくなりました。おそらくその時のストレスが、がんを引き起こす一因になったのかもしれません。

医師からの宣告を受けて手術を受け、抗がん剤治療も行いましたが、その副作用で今でも残る後遺症に苦しむことになりました。さらに追い打ちをかけるように、がんは転移。しかし、奇跡的に余命宣告のがんは消えました。とはいえ、それは終わりではありませんでした。今までに13回のがん手術を受けています。

この一連の経験は、私に大きな気づきをもたらしました。「なぜ私は生かされているのか」。その答えを、私は防犯啓発活動の中に見出したのです。

これまで書いてきた通り、犯罪者は偶発的な犯行というケースがあるものの、大半は己の欲を満たすために、「いつ」「どこで」「誰に」「何を目的に」「どうやって」犯罪を犯すか計画

的に事を進めます。一方で、被害者はほぼ**100%**「ある日突然に、また想定外に被害者になる」のです。

皆さんに犯罪者を直接捕まえることも、報復することも、事前に諭してやめさせることもできません。だから、先ずは「防犯意識」を持って頂きたい。「私は大丈夫」と何の理由もなく安心するのはやめてください。

「防犯意識」を持ってもらえたら、次には「正しい防犯知識」をつけてください。世間には残念ながら間違った防犯知識が氾濫しています。それは犯罪者を知らない人たちがその犯罪者に対する対策をビジネスとして語り、マスコミが面白おかしくそれを広めるからです。

留置場で出会った多くの犯罪者たち。彼らの中には、人生の岐路で間違った選択をしてしまった人も大勢いました。もし彼らが間違った選択をしなければ、加害者にならずに済んだ人生もあったはずです。一方で、正しい防犯知識を持っていれば、被害者にならずに済んだ人もいます。

私は、がんと闘いの中で「命の重み」を痛感しました。それは単に自分の命だけでなく、すべての人の命の重みです。犯罪は、加害者も被害者も、その家族も含めて、多くの人の人生を変えてしまいます。時には取り返しのつかない悲劇を生みます。

池田小学校事件で見た被害者家族の悲痛な表情。留置場で見た犯罪者たちの後悔の念。そして私自身の死との闘い。これらすべての経験が、私に使命を与えてくれました。

実は正しい防犯知識のもとに施される防犯対策は、たぶん今かけているコストより安価に収まるはずなのです。その理由は、本当に必要なところに必要な範囲だけ防御するから。という非常にシンプルな事です。

「防犯意識」を持ち、「正しい防犯知識」を身につけることで、皆様と皆様の家族を守り、ひいては「安全な街」「安全な国」を作ることができます。「安全に子供を育てられる。誰もが枕を高くして眠れる事は最大の福祉」だと私は信じています。

私は防犯啓発に命をかけています。正しい防犯知識を広めることで、一人でも多くの命が守られる。一つでも多くの悲劇を防ぐことができる。それが、生かされている私に与えられた使命なのです。

できれば日本の皆様にこの事実を知っていただき、「世界一安全な国、日本」にしていければと心から願っています。なぜなら、「防犯は、命を守る事」だからです。